

原 著

看護学生の母性看護学実習指導に対する 助産師を対象とした面接調査

糸魚川総合病院、看護部；助産師

小野 康代、磯貝小夜子、藤井こころ

目的：看護学生の母性看護学実習指導に対する助産師への面接調査により、以下の項目を明らかにし、今後の対応に生かしたい。

1. 看護学生の母性看護学実習指導に対する助産師の思いや考えを調査する。
2. 調査で得られた結果から、今後より良い実習指導を行っていくための対応策の検討につなげていく。

方法：実習指導を行っている助産師8名に対し、実習指導をしていて良かったと思う事と困っている事・悩んでいる事を中心に、半構成的面接法を行い、カテゴリー・サブカテゴリーに分類し分析した。

結果：1. 実習指導をしていて良かったと思う事では、(業務の振り返り、自身のスキルアップにつながる)・(指導のやりがいにつながる)・(学生の受持ち対象者にとって良い影響がある)の3つのサブカテゴリーが導き出され、《指導者にとって良かった事》・《学生の受持ち対象者にとって良かった事》の2つのカテゴリーに分類された。

2. 実習指導をしていて困っている事・悩んでいる事では、(業務を行いながらの指導への負担)・(業務に追われ指導ができない葛藤)・(学生に求めるレベルの不明確さ)・(学生の実習方法、記録物に対する思い)・(教員との役割分担から生じる葛藤)・(学生の世代、人間性に関しての戸惑い)・(以前の学生や、自身の実習時代との比較から生じる思い)の7つのサブカテゴリーが導き出され、《業務と並行し実習指導することの困難感》・《実習指導方法に関する困難感》・《学生の特徴から感じる指導困難感》の3つのカテゴリーに分類された。

結論：1. 実習指導に関わることは、自身の業務の振り返りを行い、スキルアップにつなげることができる。

2. 母性看護学実習に関わる助産師の多くが、実習指導内容・方法に関すること、学校の授業との関連、学生との関わり方、教員と実習指導者との役割分担に関して、何らかの困難感・戸惑いや葛藤を抱いていた。

3. 今後、改めて学校側と、実習方法や授業内容に関し細かい情報交換を行うこと、教員との役割分担を明確にしていくことが必要である。

キーワード：母性看護学実習、助産師による実習指導、指導者、助産師、半構成的面接法

緒 言

臨地実習は、看護が実践されている現場で、知識と技術を統合させる貴重な学習の機会であり、看護学教育に欠かせない教育方法である。臨地実習で指導にあたる「実習指導者」の認識を調査した先行研究では、実習指導を担当することを負担に感じたり、指導を行う事への困難感や不安感を抱いている姿が浮かび上がっている。

当病院では、平成21年度より看護学生の受け入れが始まった。翌22年度より、母性看護学実習として産婦人科外来および混合病棟の当病棟で実習が行われている。現在、新潟県看護協会主催の臨地実習指導者養成研修の修了者(以後修了者とする)は、当病棟に3名いるが、外来にはいない。また、実習指導の専任者として配置されていないため、夜勤等で実習日に不在になる事もある。そのため、他の助産師が修了者より学生の対応等について説明を受けたり、実習における到達目標などを確認した後、実習指導を行っている。しかし、実際の実習指導は、業務と兼任して行わなければならない。また、学生の特性や実習体制も年々少しずつ変化してきている。このような状況で、きちんと実習の到達目標にあった実習指導や学生の対応ができているのか、改めて振り返りが必要ではないかという声が聞かれてきた。

そこで、看護学生の母性看護学実習指導に対する助産師の思いや考えを、あらためて質的研究方法にて調査し、その結果からより良い実習指導を行っていくための対応策の検討につなげられるよう、この研究に取り組んだ。

対 象 と 方 法

1. 研究デザイン
質的帰納的研究
言葉のデータをカテゴリー化し、抽象度を上げながらまとめ上げていく。
2. 研究対象
平成28年8月現在、当病院産婦人科外来および病棟にて、看護学生の母性看護学実習指導をしている助産師のうち、本研究の研究者を除く8名で、年齢

- は37～56歳。
3. 研究期間
平成28年7月下旬～8月下旬。
4. 調査方法
研究対象者に、実習指導をしていて良かったと思う事と困っている事・悩んでいる事を中心に、半構成的面接法を行った。面接は30分度で行い、面接内容は対象者の同意を得てレコーダーに録音した。面接より得られた情報は、逐語的に書き起こし記述データに変換した。面接で導き出された思いを、カテゴリ・サブカテゴリに分類し分析した。
5. 倫理的配慮
研究対象者には、書面にて研究目的と方法、結果の発表方法を事前に説明した。面接は、他者が入室しない部屋において行い、面接内容を録音することに了解を得て行った。得られた情報・内容は研究以外に使用しないことを説明し、調査協力の承諾・同意を得た。また、面接内容をまとめる際は、個人が特定されないように配慮し、集めたデータは、研究終了後に破棄し、他者の目に触れないようにすることを説明した。加えて、研究に協力が得られなかった場合、途中で同意を取り下げた場合でも不利益がないことを説明し実施した。本研究は、所属組織の倫理審査会の承認を得て行った。

結 果

1. 研究対象者の概要
助産師としての経験年数は12年～34年であり、平均経験年数は18.6年であった。
実習指導経験年数は、7年が3名、6年が3名、5年が1名、3年が1名であった。そのうち、修了者は2名、実習学校主催の指導者研修の参加経験者は2名であった。
2. 研究対象者への面接から得られた結果
実習指導をしていて良かったと思う事と、困っている事・悩んでいる事の2つの群において、それぞれカテゴリ分類し、得られた結果を表1および表2で記す。
また以降、それぞれのカテゴリを《 》、サブカテゴリを（ ）、語った内容を要約し「 」で記す。
- 1) 実習指導をしていて良かったと思う事（表1）
3つのサブカテゴリが導き出され、2つのカテゴリに分類された。
《指導者にとって良かった事》では、「学生がいと正しい知識を持っていなければいけない。また新鮮な気持ちになり、それは自分の刺激になっている。」との発言があった。他6名の発言内容からも、学生に指導することは、（業務の振り返り、自身のスキルアップにつながる）ことが示唆された。また、「学生が、学べている・指導が活かされると感じられると、良かったと思う。」のように、自身の指導が学生の学びに繋がっていると実感できた時、（指導のやりがいにつながる）と感じていた。他2名からも同様の意見が聞かれた。
《学生の受持ち対象者にとって良かった事》では、「受持ち対象者と学生とのコミュニケーション

ンがうまく取れていて、情報をひきだしてきていた。」という発言があった。学生の細かな情報収集により、学生の受持ち対象者の個性のある指導につながったケースがあったこと等から（学生の受持ち対象者にとって良い影響がある）というサブカテゴリが導き出された。

2) 実習指導をしていて困っている事・悩んでいる事（表2）

7つのサブカテゴリが導き出され、3つのカテゴリに分類された。

《業務と並行し実習指導することの困難感》では、「業務をこなしながら学生を見なくてはいけないというのは、負担が大きい。」「業務と並行しての指導は、自分の思うとおりに仕事が進められなくなることがある。」のように、（業務を行いながらの指導への負担）を語った者が多かった。またその状況から、「忙しいと学生からの報告をその時に聞いてあげられない事もあり、本当申し訳ない。」等、他3名が（業務に追われ指導ができない葛藤）についても語っており、指導に専念できない現状について困難感を持っていた。

《実習指導方法に関する困難感》では、「助産師を目指しているわけではないから、どこまで理解を求めて良いのか悩む。」というように（学生に求めるレベルの不明確さ）への戸惑いが見て取れた。また、「学生がどの程度事前学習しているのかが見えづらい。」「現行の記録物では、指導した事に対する反応が全然返ってこない。みんなが目を通せるような感じになれば、やりたいことが見え、アドバイスもしていける。」のように、（学生の実習方法・記録物に対する思い）が研究対象者全員から語られた。学校の定める実習方法、記録物に対し疑問を持つ様子も見受けられた。加えて、「学生指導に手が回らず、教員に任せてしまう時がある。」「実習では、スタッフと学生との関わりの方が大事だと思う。」のように、業務との並行困難から、学校の教員に実習指導を任せてしまう現状に関する葛藤もあがっている。助産師が実習指導に関われない時、学生の受持ち対象者の指導援助に関わってくれる教員もいる。その結果「教員が学生の受持ち対象者に対し、助産師と違う方向性で指導することに疑問を感じる。」のように、学生の受持ち対象者に対する、助産師と教員との指導援助の違いに戸惑う助産師も多く、（教員との役割分担から生じる葛藤）がサブカテゴリとして導き出された。

《学生の特徴から感じる指導困難感》を抱く助産師も多いことも分かった。「実習以前の人間としての関わりから対応しなければいけない学生もいる。」のように（学生の世代、人間性に関しての戸惑い）を感じている助産師がいた。また「前のグループと比べたりする」等（以前の学生や、自身の実習時代との比較から生じる思い）を表出した助産師もあった。

考 察

今回の結果では、学生指導が助産師自身の業務・スキルの振り返りにつながり、より質の高いケアを実施

していくための、良いきっかけになっていることがわかった。そして、指導したことが学生の学びにつながったり、成長として見えた時、やりがいを感じている事が確認された。平河らは、指導者について「実習生が自分の指導を受け止めてくれること、あるいはその後実習生の看護実践が変わることが「指導の成果」だという規準を意識の中に形成している」そして、それは「実習指導をめぐる不安や葛藤とも連動している」(1)と述べている。結果からも、成長が見えない・反応がないといった時に不安や葛藤を覚え、指導内容に対し疑問や困難感を覚えるきっかけとなっていることが考察された。

それ以外にも、多くの助産師が、業務との並行に関連したことをはじめ、種々の困難感・戸惑いや葛藤を持っている現状が明らかとなった。山田らは「そのような負担感や困難感を抱えた実習指導者が少なくないということは、臨地実習に臨む学生のみならず、学生が受け持つ患者にも好ましくない影響が及ぶ可能性を示唆する」(2)と述べている。よって、このような現状を改善していくことが、今後、学生にとってより良い母性看護学実習となり、更に学生の受持ち対象者に対するより良い看護提供につながると考察された。中でも、事前学習の内容や、学校での学習内容の不明確さ、記録物等の実習方法に対し、研究対象者である助産師全員が、何らかの困難感を持っていた。そして、助産師であるが故に、看護学ではなく助産学的視点で看護学生に指導してしまうこともあり、それが学生を混乱させたり、助産師自身の戸惑いの原因となっている。このことから、実習指導者として自らに課せられた役割の不明瞭さが、助産師の不安や葛藤の原因となっていると考察される。山田らは「スタッフによる実習目的・目標への理解が学生の学びに良い影響を与える」(3)と述べている。よって、実習方法について改めて学校側と密な情報交換を行い、実習目的・目標を助産師が個々にしっかりと理解し、指導者として求められている役割を明確にしておく必要があると考察された。

また、近年の学生世代や個々の人間性に対する戸惑いから、学生との関わり方に困難感を持つ助産師も多く見られた。山田らは「なぜそのような指導をしているのか、学生に求められていることを、学生の心情をくみながら学生が納得できるように明確に伝えるコミュニケーション能力が指導者には求められる」(4)と述べている。この事から、あらためて近年の学生との関わり方について学習する機会を設けることも、助産師の困難感を軽減することにつながるのではないかと考察される。

さらに、教員との役割分担において葛藤を示す助産師も多かった。実習は、学生自身が行う看護だけでなく、現場助産師の観察の仕方や看護等からも看護者としての在り方等を学ぶ場でもある。しかし、助産師が学生と共に学生の受持ち対象者に関われないこともあり、代わりに教員が関わった時に、助産師の指導援助と違いが生じることがある。異なった指導は、学生のみならず受持ち対象者にとっても、混乱を生む原因となりかねない。そこに戸惑いを感じる助産師も少なくない。教員及び実習指導者の役割について述べられている文献は、多々ある。それらも参考にしながら、改めて教員と実習指導者との役割分担を確認していく必要性があると考察された。

結 論

1. 実習指導に関わることは、自身の業務の振り返りを行い、スキルアップにつなげることができる。
2. 母性看護学実習に関わる助産師の多くが、実習指導内容・方法に関すること、学校の授業との関連、学生との関わり方、教員と実習指導者との役割分担に関して、何らかの困難感・戸惑いや葛藤を抱いていた。
3. 今後、改めて学校側と、実習方法や授業内容に関し細かい情報交換を行うこと、教員との役割分担を明確にしていくことが必要である。

文 献

1. 平河勝美、栗田桂子、鳥居芳江他. 臨地実習指導に関する看護婦の意識の研究—困っている現象とよかったと思っている現象の意識構造の比較に見る課題—, *Quality Nursing* 1998; 4 (7): 51-8.
2. 山田聡子、太田勝正. 臨地実習指導者の現状と課題, *看護教育* 2013; 54 (7): 600-4.
3. 山田聡子、太田勝正. 看護教育専門家から臨地実習指導者への役割期待—病棟スタッフ・看護教員との連携における役割—, *看護教育* 2013; 54 (9): 854-7.
4. 山田知子、堀井直子、近藤暁子他. 看護学生の認知する臨地実習での効果的・非効果的な指導者の関わり, *生命健康科学研究所紀要* 2010; 7: 13-23.
5. 細田泰子、山口明子. 実習指導者の看護学実習における指導上の困難とその関連因子, *日本看護研究学会雑誌* 2004; 27 (2): 67-75.
6. 山田聡子、太田勝正. 看護教育専門家から臨地実習指導者への役割期待—実習受け入れ準備と学生指導における役割—, *看護教育* 2013; 54 (8): 756-61.
7. 川崎裕美、大川明子、大谷五十鈴他. 臨床指導者の学生指導に対する不安内容の検討—臨床指導者と短期大学助手の不安内容の比較から—, *広島県立保健福祉短期大学紀要* 2000; 5 (1): 99-104.
8. 山田豊子、安斎三枝子、伊藤良子他. 臨地実習における看護師の役割意識調査について—看護師の受けた看護基礎教育に関する認識から—, *京都市立看護短期大学紀要* 2005; 30: 105-10.

英 文 抄 録

Original article

Semi-structured Interview with our midwives for the maternity nursing training of the nursing students

Itoigawa General Hospital, Nursing department; midwife Yasuyo Ohno, Sayoko Isogai, Kokoro Fujii

Objective: By the interview with our midwives for maternity nursing training of the nursing students we

tried to disclose the thoughts of midwives and the improvement of practical training.

Materials and methods: The semi-structured interview method was done to our eight midwives to find their advantages and difficulties during the training of students. These data were categorized and analyzed qualitatively.

Results: 1. The training advantages consisted of three subcategories (reskill, satisfaction, good influence), and two categories (advantages as trainers, and staffs). 2. The difficulties included seven subcategories (burden, short time for training, ill-defined educational level, training method/record, conflict with nursing teacher, gap of generation of

the students, and comparison with the previous trainees), and three categories (difficulty between practical training and duties, complicated training guidance, and difficult instruction).

Conclusions: 1. Teaching resulted in reskilling trainer's abilities. 2. Most midwives as trainers held some kind of feeling of difficulty and embarrassment. 3. The careful communication with nursing teachers was required and it was necessary to make role allotment clear.

Key words: maternity nursing training, training by midwife, leadership, midwife, semi-structured interview method, qualified categorization analysis

表1. 実習指導をしていて良かったと思う事

《カテゴリー》	(サブカテゴリー)
指導者にとって良かった事	業務の振り返り、自身のスキルアップにつながる
	指導のやりがいにつながる
学生の受持ち対象者にとって良かった事	学生の受持ち対象者にとって良い影響がある

面接で得られた情報を逐語的に書き起こし、記述データに変換したことで、3つのサブカテゴリーが導き出され、2つのカテゴリーに分類された。

表2. 実習指導をしていて困っている事・悩んでいる事

《カテゴリー》	(サブカテゴリー)
業務と並行し実習指導することの困難感	業務を行いながらの指導への負担
	業務に追われ指導ができない葛藤
実習指導方法に関する困難感	学生に求めるレベルの不明確さ
	学生の実習方法、記録物に対する思い
	教員との役割分担から生じる葛藤
学生の特徴から感じる指導困難感	学生の世代、人間性に関する戸惑い
	以前の学生や、自身の実習時代との比較から生じる思い

面接で得られた情報を逐語的に書き起こし、記述データに変換したことで、7つのサブカテゴリーが導き出され、3つのカテゴリーに分類された。

(2017/11/29受付)